



大阪経済法科大学
国際学部教授
博士（国際公共政策）

菅原 絵美 氏

執行役員
コーポレート部門人事ユニット
並びに事業支援ユニット担当

有吉 毅

特 集 有識者ダイアログ

ビジネスと人権に関する取組みは 予防と救済の両輪で推進

- 2023年11月13日 東洋アルミグループ人権方針・CSR調達方針策定 -

一般社団法人グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパンで理事を務める他、大阪経済法科大学国際学部で国際人権法についての教壇に立つなど人権問題に関する専門家である菅原絵美氏をお招きし、当社執行役員でサステナビリティ担当の有吉毅と「ビジネスと人権」をテーマに対談を行いました。

原点を大切にした人権尊重で
企業としての信頼と
価値の向上につなげる

有吉: 東洋アルミグループでは人権尊重に関する取組みを一層強化するため、2023年11月13日に人権方針とCSR調達方針を策定し、ビジネスパートナーや従業員をはじめ、あらゆるステークホルダーの人権尊重に努めていく決意を新たにしました。企業活動において「人権」を捉える上でさまざまな重要項目があると認識していますが、その中でも留意するべき点は何でしょうか。

菅原: 原点が何よりも大切だと考えています。今回でいえば「東洋アルミグループがなぜ人権課題の解決に取り組むのか」の“なぜ”にあたるところですね。加えて、その論理は「人権を重視する企業が増えてきたから」「取引先に求められたから」などの受け身姿勢なものではなく、自発的なものであることも重要です。東洋アルミグループとしての強い意志や考え方を示し、説得性を持たせることで、ビジネスパートナーとなる取引先からの賛同や協力もより得られるようになり、ひいては企業としての信頼獲得や価値向上にもつながるのではないのでしょうか。

人権とは
対話を通じて
両者の主張を
すり合わせること



人とかかわるところでは
必ず人権とのつながりがある
いかに自分事として捉えるか

有吉: 企業全体としてリテラシーを向上させるには従業員の人権に対する意識の向上も大切ですね。どのように進めていけばよいでしょうか。

菅原: 東洋アルミグループでは性別や年齢、国籍問わず多様な方が、国内外のさまざまな拠点で業務にあたられています。人権問題の特徴のひとつとして、同じ問題であっても、それぞれのバックグラウンドや考え方の違いなどから課題の出現の仕方が変わるという点が挙げられます。社内浸透を進める中で大切なのは「自分の業務と人権というテーマをどのように関連づけるか」「どのように自分事として捉えるか」だと考えます。

有吉: 「人権」というワードだけでは、漠然としたイメージで捉える人もいるかもしれません。

菅原: おっしゃる通りで、「人権」と聞くとどこか遠いところの話のように考えてしまう人がいます。しかし、人は誰もこれまでの経験から何らかのバイアスを持っているもので、それ故に人とかかわるところではどこでも人権問題が発生する可能性があります。自分も人権問題に関わるうちの一人だと自覚することができれば、自ずと自分事として認識でき、社内浸透が進んでいくでしょう。

有吉: 私は執行役員という立場もあり、方針や取組みの内容を考えることばかりに意識を取られがちですが、自分自身も含め従業員が自分事として落とし込めるようになることが重要だと改めて分かりました。社内浸透のためにも、しっかりとコミュニケーションをとっていく必要があると感じました。

問題を起点に対話を進めることで
人権リスクをマネジメントする

菅原: 今コミュニケーションというキーワードが出てきましたが、人権は対話することだとも考えています。権利はぶつかり合いがちなもの、人権

丁寧な
コミュニケーションで
社内浸透を図る

に関しても同じことが言えます。対話とは、権利がぶつかり合ってしまった時にお互いの主張の落としどころを見つける作業です。人権リスクのマネジメントとして、体制や枠組みを整えることはもちろん重要ですが、これに加えて、問題が発生してしまったときの調整に取り組むこともまた重要です。いわゆる「予防」と「救済」の両輪で進める必要があるのです。

有吉: 今のお話から、コミュニケーションの重要性を改めて再認識しました。人権問題はどこでも起こり得るものであり、そこを起点に対話を始めていくという姿勢が大事ですね。

菅原: 東洋アルミグループでの活動内容を見ると、採用面や、多様な人財が活躍されている点などから、すでに人権課題の解決に取り組まれているという印象を抱きました。今後は社内のみならず、川上から川下までのサプライチェーン全体で人権課題を捉えていただけたらと思います。繰り返すようですが、対話のプロセスが信頼を生み、それが選ばれる企業の要件になると考えています。

有吉: 本日は貴重なご意見とアドバイスをいただき、ありがとうございました。参考にさせていただきながら、今後もあらゆるステークホルダーとの対話に励んでいきたいと思います。